

第一章 ライフヒストリー研究の展開

ライフヒストリーは、学校の方針やカリキュラムが教師によって受容され、実施される過程を検討する研究手法の一つである。ウッズ「訳註…イギリス、オープン・ユニヴァーシティの教授、教師研究で高名」は、次のように巧みに論じている。彼が調査した教師、トムにとって、

カリキュラムという領域は、教師の生活における苦しみやつまずき、助け合い、喜びと悲しみ、策略とその対策から生まれ出た、活気ある人間的な過程である。たんなる知識の集合体や技術の寄せ集めではない。まして集団による行動の結果でもない。トムの事例は、個々人が自分自身の人生を描き、さらに個人の深層においてカリキュラムと関わられることを、少なくともある程度は示している。このことを十分に正しく評価するためには生活全体を視野に入れる必要があるのだと、私は論じてきた。⁽¹⁾

ライフヒストリーという手法の起源

最初のライフヒストリーは、今世紀の初頭、文化人類学者によってアメリカ・インディアン酋長の自伝が集められたことにはじまる。それ以来、ライフヒストリー研究は主として社会学者によって行われてきた。本章では、ライフヒストリーを学校研究に用いるべきだと論じようとしているが、ライフヒストリーの盛衰を検討するには、社会学者によって現在までのようにライフヒストリーが用いられてきたのかを究明しておかなければならない。社会学者にとってライフヒストリー研究発展の重要な画期は、一九二〇年代にトーマスとズナニエツキの壮大な研究『生活史の社会学——ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』(一九二七年)によってもたらされた。トーマスとズナニエツキは、アメリカに移住したポーランド農民の経験を検証する際に、主に移民の自伝的記述、日記、そして手紙を使用した。この著者たちにとって、ライフヒストリーは社会学における最良のデータであった。

個人の経験や態度を分析するとき、われわれはその人のパーソナリティに限られないデータや基
本的事実にぶつかるのが常だ。それらは多少なりとも一般性を備えたデータや事実の集まりの例

として処理できるし、それゆえ社会的生成の法則の決定因にも使うことができる。社会学的分析のための資料を引き出すのに、ある一人の詳しい生活記録から引こうと、大量現象の観察から引こうと、いずれにしても社会学的分析に当たった問題は同じ事である。ただ抽象的な法則を探求しているときでも、具体的なパーソナリティの生活記録にはほかの種の資料と比べても際立って優れた点がある。個人の生活記録をできるだけだけ揃えれば、それは完璧な社会学資料となると言えよう。だから社会学が仕方なくほかの資料を使わざるを得ないのは、社会学的問題の総体を覆い尽くすことができるような記録を、その時々⁽¹⁾に実際問題として十分入手できないという理由と、社会集団の生活の特徴づけに必要な個人的な資料をすべて適切に分析するには莫大な労力が必要だという理由があるためにほかならない。かりに大量現象を資料として、またある出来事をそこに参加した諸個人のライフヒストリーと関係なくやむを得ず使っているとすれば、そのことは現在の社会学的方法の欠点ではあっても利点ではあり得ない⁽²⁾。

トーマスとズナニエツキの先駆的業績により、ライフヒストリーは正当な研究手法として確立された。ライフヒストリーの傑出した地位は、シカゴ大学において、とくにロバート・パークが行った社会学的研究の華々しい伝統によってさらに強化された。パークの下で完成した都市生活研究として、スラッシュャー『ギヤング』(一九二八年)、ゾーボー『ゴールドコーストとスラム』(一九二九年)、アング

